

離縁を覚悟していたのに、

腹黒王子に夜毎淫らに溺愛されています

目次

離縁を覚悟していたのに、
腹黒王子に夜毎淫らに溺愛されています

5

番外編① 花束を貴方に

233

番外編② その後の二人

281

離縁を覚悟していたのに、
腹黒王子に夜毎淫らに溺愛されています

プロローグ

「私、聖女クララはリシャルド王子殿下を褒賞として望みます」

見目麗しい聖女は、そう言って美貌の王子——リシャルド・レヴォルネに目を向けた。

広間のどよめきに構うことなく、聖女は王子をじつと見つめる。美男美女が見つめ合う光景は、まるで童話の一場面を切り取ったかのようだ。

そんな二人の姿を見て、私ユスティア・レヴォルネは心中穏やかではなかった。

なぜならリシャルドは……私の夫なのだから。

話は数時間前に遡る。

私の夫であるリシャルドは、誰がどう見ても最上級の美貌の持ち主だ。

透明感のある銀色の髪は、風が吹くたびにさらりとなびく。艶やかな髪に浮かぶ“天使の輪”が形を変えるだけで、心臓がドキドキと高鳴るほどだ。

髪だけでも見事だというのに、彼の肌は抜けるように白い。上質な陶器のような質感のせいか、いつかの夜会で「あまりにも美しく、触れたら壊れてしまいそう」と令嬢たちに囁かれていた。

正直なところ、令嬢たちの気持ち痛みほど分かる。実際、私は彼に触れる前は必ず、自分の爪が伸びていないかを確認してしまう。

なにより、極め付きは瞳だ。理想的な二重瞼と長いまつ毛の下で輝く金色の瞳は、まるで宝石のように美しい——ぼんやりと見惚れながらそんなことを考えていると、不意に彼の柔らかな唇に金縁のティーカップが近づけられた。

「うん、やっぱりウクラリフのハーブティーは格別だね」

ティーソーサーにカップを置いて、リシャルドは満足げに微笑んだ。

何気なく紅茶を飲むだけで絵になる彼の姿に、思わず笑みがこぼれる。

「ふふっ、そうですわね」

レモンバームの爽やかな香りを楽しみながら、私はリシャルドの言葉に頷いた。

隣国ウクラリフの夜会に招かれた私たちは、宮殿のゲストルームでお茶をしていた。

ウクラリフ王室の人々への挨拶は終わったものの、まだ時間に余裕がある。そこで私たちは夜会の準備を始める前に二人でゆっくり過ごすことにしたのだ。

「ハーブティーって味の主張が強いものも多いけど、これはお菓子との相性がいいね」

イチゴジャムののったクッキーを一つ食べてから、リシャルドはそう言った。

「ええ、とっても美味しいですわ。ウクラリフの名店のクッキーだそうですよ。ひとつ買って帰ろうかしら」

そこまで言ったところで、リシャルドが残念そうな顔をしていることに気がついた。

首を傾げると、彼は深いため息を吐いた。

「でも、お菓子はやっぱりティアの作ったやつが一番好きだな。少しくらい取っておけば良かった……なんか、頑張る気が起きないなあ」

上目遣いにリシャルドにそう言われ、どうしたものかと考えを巡らせる。

結婚前から私は趣味でよくお菓子作りをしていて、嬉しいことにリシャルドは私の作るお菓子をとても気に入ってくれている。

そこで出発前、旅の供として焼き菓子をたくさん用意した。でも、私たちの国、カルナルタからウクラリーフまでは馬車で五日ほどかかることもあり、すべて食べ切ってしまったのだ。

「はあ……夜会、欠席してもいいかな」

「リ、リシャルド様……その、お菓子でしたら帰ったらいくらでもお作りしますから……!」

落ち込んだ様子でぼそりと呟いた彼に、私は慌てて言った。

「ふふっ、冗談だよ」

落ち込んでいたのが嘘だったかのように、リシャルドが明るく笑った。そこでようやく、私は自分がかかわれていることに気づいた。

「なっ……!! 悪いご冗談はおやめくださいな」

「ごめんごめん、ティアが可愛いから、つい」

「っ、またそうやってお戯れを……」

愛称で呼ばれ、ドキッとすする。

結婚して以来、ティアと呼ばれるようになったけれど、正直いまだに慣れない。それに冗談だと分かっているけど、可愛いと言われるのは心臓に悪い。

気持ちを落ち着かせるために、ハーブティーを口にする。

「本当に可愛いって思ってるんだけどな」

「……っ」

追い打ちをかけるように言われて、お茶を吹き出しそうになった。どうにか飲み下してからリシャルドの顔を見ると、彼は驚いたように目を丸くしていた。

「何、いつも言ってることじゃないか。そんなに驚かなくなっただっていいだろ?」

「……お戯れはやめてくださいませ」

「強情だなあ、ティア」

クスクスと笑うリシャルドに呆れながら、私は軽く息を吐いた。

いつもこうやって、知らぬ間に彼のペースに吞まれてしまうのだ。

リシャルドと夫婦になってから半年が過ぎたけれど——私はまだ彼の妻であることに、慣れていない。

でも、愛しい彼といられるだけで、私は幸せだ。

「そう言えば、ティア。ウクラリーフの聖女の話って知ってる?」

二杯目のハーブティーを飲み始めたところで、リシャルドに尋ねられた。

「いえ、初めて聞きましたわ」

「強い聖力を操る女性が現れたんだってさ。元は普通の女の子だったのに、急に覚醒したとかで」
「へえ……」

「俺も噂でしか知らないけど、もしかしたら今日の夜会でお目にかかれるかもしれないね」
カルナルタにもごく少数、聖力を持つ人々がいる。でも、聖力の有無は生まれつき決まっているものだとも聞いていた。後天的に、しかも強い聖力に目覚めたという話を聞くのは初めてだ。
「どんな方なのか、お会いするのが楽しみですね」

聖女に想いを馳せながら私がそう呟くと、部屋の扉をノックする音が聞こえてきた。

「ご歓談中、失礼いたします。リシャルド王子殿下、ユスティア妃殿下。お時間でございます」

「ああ、分かったよ。すぐ行く」

リシャルドは席から立ち上がり、扉越しに控えるメイドにそう返事をした。

壁掛け時計を見ると、夜会の支度を始めるのにちょうどよい頃合いだった。私も空になったティーカーップを置いて、席を立つ。

「ティア」

「っ、ん……！」

部屋を出ようとしたところで、リシャルドに肩を引かれてキスをされた。

舌を差し込まれ、口の中で二人の熱が絡まり合う。情事を彷彿とさせる艶めかしい感覚に、腰が砕けてしまいそうになった。

このままではいけない。

まさにそう思った瞬間、濃密な口付けから解放された。

「……っ、は、リシャルド様」

「ちゃんと手加減しておいたけど……ティア、もう蕩けてるね」

「……！」

リシャルドに言われて、私は熱い顔を両手で押さえて隠した。こんな姿、他人に見られる訳にはいかない。

「俺以外、誰もいないから大丈夫だよ。こんなに真っ赤になって……ウブだなあ」

「リシャルド様……っ、その、もう支度の時間ですので……」

そう言って身体を離そうとした私を、リシャルドは抱き締めた。彼の腕の中で顔を上げると、また一つ口付けを落とされた。

「ここに来るまでの間、ずっと触れ合えなかったでしょ？」

「そ、それは……」

「だから、少しぐらい甘えさせて」

眉を寄せて、リシャルドは私の耳元で囁いた。ブロンドの長い髪を手櫛で梳かれ、流れるような動作で顎に手を添えられる。

カルナルタを発つ直前まで、リシャルドは別の公務に参加していた。それに馬車での移動中は、使用人たちの目があった。こしばらく、彼との触れ合いはおやすみのキスだけになっていたことに、私は今更ながら気づいた。

「し、承知しました……」

「ありがとうございます」

扉越しに控えるメイドを気にしつつも、私はリシャルドに身を任せる。

「夜会のドレスとジュエリーはもう決めた？」

「い、いえ……まだ迷っています」

夜会のために持ってきたドレスを頭の中で思い返す。予備を兼ねて、ドレスもジュエリーも系統違いで複数用意している。

「……せっかくだから、思いっきり着飾ってもいいんじゃないかな？　こうして指輪も着けてるんだし」

私の左薬指を撫でながら、リシャルドは囁いた。そこには、彼から贈られた婚約指輪と結婚指輪が重ね着けされている。

ティアラを象ったプラチナ製の二つの指輪には、立派なダイヤモンドが付けられていて、瞬く星のようにキラキラと輝いている。

でも、そんなダイヤモンドのまばゆい煌めきが……自分の指には不似合いにも思えた。

（思いっきり着飾るだなんて……私には不相応だわ）

そんな言葉を呑み込んでから、私は口を開いた。

「……湯あみが終わるまで、少し考えさせてくださいな」

「ああ、楽しみにしてるよ」

なんとか作り笑いを浮かべてから、私は浴室へと向かった。

「国王陛下、今宵はお招きいただきまして、ありがとうございます」

夜会の会場となる大広間に着いてから、私とリシャルドは改めてウクラーリフ国王一家に挨拶をした。

「こちらこそ、我が国までお越しいただき、ありがとうございます。リシャルド王子殿下、ユスティア妃殿下」

ウクラーリフは隣国であるため、国王をはじめ王族の人々はみな顔見知りばかり。歓談はすんなりと進んでいく。

「さて、聞き及んでおられるかとは思いますが……お二方にはぜひ、我が国の聖女殿をご紹介します。よろしくお願いいたします」

そう言って、国王はひとりの令嬢を呼んだ。

「クラーラ殿、ご挨拶を」

「リシャルド王子殿下、ユスティア妃殿下、初めまして。ウクラーリフの聖女、こと、ミエルハ男爵家長女のクラーラと申します」

クラーラと名乗った令嬢は、聖女と呼ぶにふさわしい清楚で華やかな雰囲気的女性だった。

私より一、二歳ほど年下だろうか。嫌味のない上品な顔立ちながらも、大きな青い瞳とぷつくりと膨らんだ唇が印象的だ。柔らかな金糸のような長い髪が、シャンデリアの光を受けて艶めいて

いる。

品の良さと愛らしさを兼ね備えた彼女の姿に、私はすっかり圧倒されていた。

「こちらこそ初めまして。私はカルナルタ第一王子のリシャルドと申します。隣は、妻のユスティアです」

「聖女クララ様、初めまして。ユスティアと申します」

夫婦そろって挨拶したものの、クララはリシャルドの顔に釘付けになっている。どうやら、彼女も夫の美しさに目を奪われたようだ。

無理もない、と心の中で思う。着飾ったリシャルドはまさに「美貌の王子」という彼の二つ名にふさわしい外見をしているのだから。

「ウクラーフと我が国カルナルタは長きにわたり、友好な関係が続けて参りました。ゆえに、今後クララ様とお会いする機会が度々あるかと。これから、どうぞよろしくお願ひします」

「……こちらこそ、よろしくお願ひします」

こうして聖女への挨拶を終えたリシャルドと私は、他の招待客たちに挨拶するため、その場を後にしたのだった。

「おお、リシャルド王子殿下。今宵も素敵ですな」

「お褒めのお言葉、ありがとうございます」

国王たちと別れて広間を歩いていると、リシャルドの周りにすぐに人の輪ができあがった。

「今夜のお召し物や装飾品も、すべてカルナルタのものでしょうか？」

「もちろんです。耳飾りから靴に至るまで、すべて我が国で作られたものですよ」

「まあ……！」

リシャルドの一言に、周囲は歓声を上げた。華やかな装いの美男子の微笑みに、皆が色めき立った、と言った方が正しいかもしれない。

カルナルタでは、令嬢だけでなく若い令息も華やかに着飾って、社交の場に花を添えるのがマナーとされている。

そういった慣習もあり、リシャルドは今宵も存分に着飾っていた。

着飾ることにより、周囲を楽しませる。それは、どこの夜会でも彼が必ず求められること。

そして、真に重要なのはここからだ。

「殿下のお袖の刺繍、とても珍しい模様をしてらっしゃるのね」

「ありがとうございます。実は、我が国の職人たちが新たに考案した模様なのです。夜の海をイメージしたもので、夜空に輝く星々と月の光に照らされた海辺に咲く花を描いております」

「刺繍ですと、お花や蔓草つる草の模様のはたくさんありますけれど、このデザインは初めて見ましたわ」

「おっしゃる通りです。ですから、私も初めて目にした時は驚きました」

にこやかにリシャルドと貴婦人が歓談しているのを見て、少し離れた位置でとある国の国王がポツリと呟く。

「ふむ、そのままでも十分に素晴らしい模様だが……我が国特産の真珠を縫い付ければ、さらに素晴らしい一着になりそうだ」

その一言を、リシャルドが鮮やかに拾い上げる。

「至宝と謳うたわれる貴国の真珠の輝きには到底敵かたいませんが……嬉しいお言葉をありがとうございます。よろしければ、後ほどぜひゆつくりお話しさせていただきますのですが、いかがでしょうか」

「なんと！こちらこそ、それはぜひとも……！」

そう。私たちがこうして自国製の品を身に着けているのは、我が国の技術や特産品を他国に紹介するためなのだ。

カルナルタは物作りと貿易によって発展してきた。そのおかげで大国となり、現在は存在感を示しているが、今後も安泰とは限らない。国の永続的な繁栄のため、常に新たな道を開拓していかねければならない。

商機を掴む。それが、私たちが社交の場に参加する際に与えられた使命なのである。

「リシャルド王子殿下、ご無沙汰しております」

「お初にお目にかかります、私……」

顔見知りから初対面に至るまで、リシャルドの周りには代わる代わる人がやって来る。それは、彼の類まれなる美貌と人あたりの良さ、そして巧みな話術によってなせる技だろう。

リシャルドは、義母上譲りの銀髪と金色の瞳をしている。どちらも珍しい色であり、初めて目にした人は大抵彼を二度見する。

それに加えて、リシャルドは義父上譲りの整った顔立ちだ。

特異な色合いと、美しい目鼻立ち。それらが掛け合わさった結果、この世のものとは思えないほど美しい「リシャルド」という存在が生まれた訳だ。

銀の髪は珍しいと思いついて目を留めて、それから顔立ちのあまりの美しさに気がついて驚嘆する。そうやって、誰もがリシャルドに引き寄せられるのだ。

リシャルドと一度でも話したならば、彼を好かぬ人はいない。いつの間にか人々はリシャルドの虜こゝろになってしまふ。

美しく聡明な王子。リシャルドはまさに、そんな存在なのである。

「ユステイア妃殿下がお召しのドレス、とっても柔らかそうな布地ですわね」

歓談の輪にいた老婦人が、私に声をかけてくれた。すかさず私は、にこやかに微笑んで口を開いた。

「ありがとうございます。こちらも我が国で新たに作られたものでして、柔らかさだけでなく、羽のような軽さと着心地にも優れておりますの」

「まあ、それは魅力的ですわね。近頃どうにも、硬い生地ドレスを着るのは辛くて……」

「ふふっ、ならばこちらの布地はとってもおすすすめですわ」

リシャルドのように華々しく着飾っている訳ではないものの、こうやって私に話しかけてくれる人もいる。

無理やり売り込むことはしないけれど、身に着けているものはすべて自分が良いと感じたものな

ので、人に説明したり勧めたりすることはできる。おかげで会話が弾み、最近では招待客との歓談を
楽しむ余裕が出てきた。

地味な私でも、こうして少しは祖国に貢献できている。私は密かにそう感じていた。
「今宵のドレスもとってもお似合いですけれど……私、ユスティア様が豪奢に着飾っていらっ
しやる姿も、ぜひ拝見したいですわ。少しもつたいたなく感じられてしまっただけです」

歓談の最中、そんなことを友好国の若い王女に言われ、私はぎくりとした。

今回、私が身に纏まとっているのはネイビーのドレスで、ジュエリーもシンプルなものを選んだ。良
く言えば大人っぽく落ち着いた、明け透けに言えば、社交の場にしては地味な装いだ。

対して、リシャルドは白地に金糸の刺繍が施された夜会服を着ている。さらに、片耳にはダイヤ
モンドが輝く純金の耳飾りをつけている。彼の生まれ持った美貌も相まって、この会場で誰よりも
人目を惹いている。

リシャルドのジャケットの襟がネイビーということもあり、私たちが夫婦であることは辛かろうじて
服装から察せるようにはなっている。

けれど、夫婦として釣り合っているかと言えば、答えは「いいえ」だ。

不釣り合いな夫婦。時折そんな陰口を叩かれていると知っているけれど、私には華やかなドレス
もジュエリーも似合わない。

だから私は、リシャルドの引き立て役に徹している。

……なのにリシャルドは、私の心の内をまったく理解していないようだ。

「そう思われるでしょう？ 私からも毎回、もつと着飾ってほしいと伝えているんですが……な
なか聞いてくれないのです」

王女の言葉に深く頷きながら、リシャルドは困ったような表情をした。

「リ、リシャルド様……」

「ほら、ユスティア様。王子殿下も仰おほっているではないですか」

逃げ道を塞がれてどうしたものかと考えていると、ウクラリフ国王がパンパンと手を打った。
「どうやら、夜会の終了時刻となつたらしい。」

「皆様、今宵は遠路よりご参加いただきまして、ありがとうございます。我が国が活気を取り戻
すことができたのは、皆様のご協力があったからこそでございます。今後も未永く、友好な関係を
続けていきたいと考えています。それでは、今宵はこれにて……」

「国王陛下。一言だけ、よろしいですか？」

「クララー殿？ ああ、もちろんだとも」

国王の締めとじめの言葉を遮とぎやったのは、聖女クララーだった。

彼女は国王の傍そばに歩み寄より寄よりから、もう一度口を開く。

「陛下、私は今日に至るまで、ウクラリフのために力を尽くしてきたと自負しております」

「うむ、その通りだ。貴女は聖力を発現させてからというものの、ずっとウクラリフのために仕
えてくれている。我が国にとってかけがえのない存在だ」

「ありがとうございます。……陛下は以前、私に褒美をくださると仰おほいましたが、覚えていらっ

「しゃいますか？」

「ああ。もちろん覚えていても」

「ならば……」

クララーは、信じられない一言を口にした。

「私、聖女クララーはリシャルド王子殿下を褒賞として望みます」

クララーの一言で、広間全体にどよめきが広がる。

当然ながら、私もひどく動揺した。

「ク、クララー殿……それは、さすがに……」

ウクラーリフ国王も見るからに慌てていた。おそらくクララーは、事前の相談なしに先ほどの発言をしたのだろう。

そんな国王に構うことなく、クララーは言葉を続ける。

「以前、陛下は可能な範囲であれば、望むものを何でも私にくださると仰いましたよね？」

「そ、それはそうだが……王子殿下は我が国ではなく、カルナルタのお方だ。なにより、すでにユステイア妃殿下とご結婚されているではないか」

「結婚しているとはいえ、ご本人から了承が得られれば問題ありませんよね？ 私、リシャルド王子殿下以外は褒賞として一切認めませんわ」

クララーの一言に、国王は言葉に詰まった。

ウクラーリフは聖女の力に支えられている。そのため、国王であつても無下にはできないのだ

ろう。

「と、とりあえず……この話は、日を改めて……」

「いいえ、この場ではつきりさせていただきたいと思つています。リシャルド王子殿下、どうかこちらへ」

クララーは、リシャルドに進み出るよう声をかけた。

同盟国の聖女に名指しで呼ばれては、応じざるを得ない。私は何も言わず、リシャルドと組んでいた腕を解こうとした。

しかし、解こうとしていた腕をリシャルドに掴まれた。

慌ててリシャルドを見上げると、彼は「一緒に来て」と囁いた。とはいえ、クララーに呼ばれたのはリシャルドだけ。私がついていけば不興を買うだろう。

躊躇う私に、彼は「大丈夫だから」と付け加えた。

「……っ」

リシャルドの自信を湛えた笑みに背中を押される形で、私は頷いた。

夫婦二人で玉座の前まで進み出ると、クララーはあからさまに嫌そうな顔をした。彼女からすれば、おじやま虫がついてきたようなものだから当然だ。

そんな不機嫌極まりない様子の聖女を前にしても、リシャルドが動じることはなかった。

「クララー様、一国の王子にすぎない私をお目に留めていただき、大変光栄でございます」

「ということは、貴方は褒賞となつてくれるのね？ リシャルド様」

リシャルドの一言を聞いて、クララは笑みを浮かべた。私は反対に、顔がこわばっていくばかりだ。

貴族令嬢が王族を敬称なしに呼ぶなんて、通常はありえない。馴れ馴れしいどころか、不敬ともいえるクララの態度に、私の心はざわついていた。

だが、リシャルドの言葉には続きがあった。

「……続きのお話は後日とさせていただければと思います。妻がとても驚いておりますので」
申し訳なさを滲ませた声色で、リシャルドは聖女にそう告げた。

私は即座に彼の意図を理解した。

ウクラリフは同盟国というだけでなく、カルナルタにとって重要な貿易相手でもある。ゆえに、この場で波風を立てるのは得策ではないと判断したのだろう。かといって、下手に言葉を濁して誤解を招く訳にもいかない。

その結果、リシャルドが導き出した答えは、一旦保留だった。

夜会の主催者であるウクラリフ国王の顔を立てるという意味でも、最適解だと思う。

「ク、クララ殿、リシャルド王子殿下もこう言っているのだから……」

「っ、私はこの場ではつきりとしたお返事が欲しいのです！」

国王がホツとしたのも束の間。なんとクララは声を荒らげて食い下がってきた。

クララはリシャルドにツカツカと歩み寄ると、真正面から彼を見つめた。

彼女のガラス玉のような美しい碧眼と人形のような愛らしい顔立ちは、同性の私から見ても魅力

的だ。彼女に見つめられれば、きっと誰もがときめくだろう。

でも、今はしみじみとそんなことを考えている場合ではない。

彼女が狙っているのは、私の夫なのだから。

とはいえ、この場で自分にできるのは、この成り行きを見守ることだけ。私は口を閉ざし、リ

シャルドとクララを交互に見つめた。

「なるほど。クララ様のお気持ち、よく分かりました」

「……っつてことは！」

「その上で考えさせていただきましたが、やはりこの場でのお返事は致しかねます」

「なっ、何で？ どうして？」

「仮に私がクララ様の褒賞になるとしても、当然ながら事前の準備は必要です。結婚というところまで考えると、私の両親にも話を通すべきかと思えますし」

「……」

「貴女の夫となるならば、万全を期してご準備させていただきましたきたいのです」

そこまで言って、リシャルドはクララに笑いかけた。

（リシャルド様……さすがだわ）

断る前提で返事を保留すれば、クララはきつと引き下がらない。

だから彼は、クララと結ばれる準備のために保留にしたいと言ったのだろう。

「だったら、仕方ないですね」

「ありがとうございます。また追って、ご連絡させていただきます」
リシャルドの読み通り、渋々ながらもクラウラは返事の保留を了承した。
突然の出来事にもかかわらず、彼は完璧な立ち回りで聖女の要求を躱した……のだと思う。
そう理解しているはずなのに、なぜか私は一抹の不安を感じていた。

第一章

十日後。カルナルタの宮殿の門前に馬車が着く頃には、すっかり夜になっていた。

「二人とも、お帰りなさい」

「夜会は楽しめたかい？」

帰宅すると、義母上と義父上が出迎えてくれた。笑みを浮かべて答えを返そうと思ったのに、どうにもぎこちない表情しか作れなかった。理由は、言わずもがな。

「あら、どうしたの？ ユスティア。もしかして、体調が悪いの？」

「だ、大丈夫です。どうぞご心配なく……」

そんな会話をしながら、義両親たちとの再会を喜んでいると、リシャルドが不意に真面目な顔つきになった。

「父上、母上。帰国早々申し訳ありませんが、一件報告させていただきたいことがあります」

リシャルドの一言で、義父上と義母上は顔を見合わせた。

そして何かを察したかのように、すぐさま真剣な表情になったのである。

「分かったわ。ユスティア、あとはリシャルドに任せて、貴女はゆっくりお休みなさいな」

私を安心させるような穏やかな口調で、義母上はそう言ってくれた。

「長距離の馬車移動で疲れただろう？ 今日では早く寝るといい」
「ありがとうございます……それでは、失礼します」

義父上にも促され、私は軽く会釈をする。
すると、後ろからパタパタと可愛らしい足音が聞こえてきた。

「あ、いた！ おにい様！ おねえ様！」

可愛らしい声に呼ばれて振り返ると、義弟のイエジイが駆け寄って来た。寝間着姿なので、おそらく寝室から出てきたのだろう。その腕には、大きなクジラの抱き枕が大事そうに抱えられている。クジラが大きすぎるあまり、イエジイはしつぽを床に引きずっていた。

「こら、イエジイ。もう寝る時間だろう？」

リシャルドがしゃがんで視線を合わせてからイエジイをたしなめるものの、イエジイはぶくつと頬を膨らませた。

イエジイは水玉柄のパジャマを着て、三角のナイトキャップを被っていた。パジャマの袖と裾が長すぎて二つ折りになっていることもあり、まるで童話の可愛らしい小人そのものだ。

「僕、おにい様もおねえ様もないのが寂しくて、ずっと寝れなかったんだ。今日はちゃんと寝るから、おねえ様に絵本を読んでもほしいの……ダメ？」

私のスカートの裾を片手で握りながら、イエジイは言った。

イエジイは、リシャルドと十歳以上歳が離れている。まだまだ甘えたい盛りで、私にもよく懐いてくれた。

そんな可愛い義弟のお願いを、断れる訳がない。

「ふふっ、もちろん。大丈夫よ」

「やったあ！」

私が頷くと、イエジイは嬉しそうにびよんびよんと飛び跳ねた。

「いいのかい？ ティア」

「もちろんです。イエジイ、まずはお兄様にもおやすみなさいしましょう？」

「うん！ おにい様、おやすみなさい！」

「やれやれ……おやすみ、イエジイ」

「じゃあ、行きましょうか」

イエジイと手を繋いで、私は彼の寝室へと向かった。

イエジイを寝かしつけて入浴を終えてから、私は寝室へと向かった。扉を開けると、リシャルドは先に部屋に来ており、ベッドに座っていた。

「ティア、イエジイのお守りをさせて、すまなかったね」

「ふふっ、可愛い寝顔を見れて私は幸せですわ」

リシャルドの隣に座りながら、私は言った。クラーラのことで不安になっていたものの、イエジイと過ごしたことで、心はだいぶ落ち着きを取り戻していた。こんな形で義弟に助けられるなんて、思ってもみなかった。

「父上たちには、夜会のこととは全部伝えておいたから」

「……ありがとうございます」

夜会のこと、と言われて心に暗い影が落ちた。普段であればどんな品を誰に紹介したかという話
が中心になるけれど、今回はきつとクララの件に関する報告がほとんどだったはずだ。

頭の中であの一幕がフラッシュバックして、思わずため息が漏れた。

「ティア」

私が何か言葉を口にするより早く、リシャルドは私の手をそっと握った。義両親への報告の後、
彼も湯あみをしてきたのだろう。柔らかな温もりが残る手のひらの感触は、とても心地よい。

「イエジイみたいな可愛い手じゃないから、物足りないかな？」

「っ、笑わせないでくださいな」

すらりとしたリシャルドの手は、幼子のプニプニとした手とはまったく違う。予想外の一言に、
私はつい吹き出してしまった。

「やっとなめてくれた」

「え？ んっ……」

身体を抱き寄せて、リシャルドは私に口付けた。

衣服越しにじんわりと伝わってくる湯上がりの温もりは、春の日差しのように柔らかかで、心地よ
い。このまま眠りについてしまいたいくらいだ。

しかし、そんな温かな抱擁と共に与えられるのは、寝る前の軽いキスではなく、舌を絡める濃密

な口付け。

「っ、リシャルド様……」

「ティア、聖女が何と言おうと関係ない。俺たち夫婦の仲を裂くなんて絶対に無理だ。だから、安
心して？」

「……っ」

カルナルタでは王族が離婚することは原則できない。妃を二人以上持つことも禁じられている。

夜会での一幕には動揺したものの、実際のところ、クララとリシャルドが結婚するのはほぼ不
可能なのである。

リシャルドの力強い言葉に、頭の中にあつた不安が掻き消されていく。

「……は、はい」

「ん、安心したみたいで良かった」

私の唇を指先でつつきながら、リシャルドが笑った。飼い猫を可愛がるような指先の動きに、私
は密かに胸を高鳴らせる。

なぜならそれは、リシャルドがベッドの上でしかしない仕草だからだ。

すでに夜も更けているので、明日に備えて眠ってしまった方がいい。

でも、さっきのキスのせいで身体が熱を帯びている。明日も朝から忙しいリシャルドに「おねだ
り」をするなんて、我儘にも程があると頭では分かっているけれど――

熱を堪えるように身体をモゾモゾさせていると、リシャルドは私の耳元で誘惑するように囁く。

「ティア。もう寝る？ ……それとも、もう少し起きてたい？」

このまま寝るか、夫婦の時間を過ごすか。情事とははつきり言わず、リシャルドは私に問いかけた。

「……っ、もう少しリシャルド様と、ご一緒したいです」

「ん、じゃあ、そうしょっか」

流れるような動作でリシャルドは私をベッドに組み敷いた。

真っ白なシーツの上に、二人分の影が落ちる。金色の瞳に見下ろされ、私は自然と身を硬くしていた。

「ん……」

もう一度深く口付けられて口の中で舌が絡まり合うと、彼を求めるように、じわりと秘所に蜜が滲んでいく。

キスをしながら、リシャルドは私の胸をナイトドレスの上からゆくりと揉みしだき始めた。

「っ、リシャルド様……」

「ん、痛かった？」

「痛くはないですけど……そ……んな、触らないでくださいな」

「どうして？」

分かっているはずなのに、リシャルドは胸の愛撫を続ける。

どうやら、はつきり言わなければやめるつもりはないようだ。私は羞恥を我慢して、口を開いた。

「その……これ以上、大きくなったら困りますので……お胸をそんなに、揉まないでください……っ」

「ん？ 良いところは褒めて伸ばさなきゃだろ？」

「そっ、そんな……ドレスが入らなくなったら大変ですから……」

なぜだか私の胸は、並の女性よりも大きい。デコルテが大きく開いたドレスを着ると、悪目立ちして妙な視線を集めてしまうほどだ。正直、私は自分の体形があまり好きではない。

「服も下着も、サイズが合わなくなったら全部新しく買ってあげるから」

布越しに主張を始めた胸の小さな尖りをふにふにと押しながら、リシャルドは嬉しそうに笑った。「そんな……っ、んんっ」

「ふふっ、可愛いな、ティア」

リシャルドにナイトドレスの胸元のリボンを解かれ、隠されていた乳房が露わになる。

胸の頂はすでに硬く尖り、先端に布が擦れただけで快感を拾い上げてしまう。私の身体が軽く震えたのを見て、リシャルドは再び口を開いた。

「びっくりさせてごめん。ただ……ここは嫌がってはいないような気がするんだけど、違った？」

「あ、ああっ……」

ちゅ、と甘く乳首を吸われて、私は声を上げた。

「ひっ……っ、あっ……」

私が音に弱いのを知ってか知らずか、リシャルドは唇の音が鳴るように胸を吸い始めた。

「ん……、甘い」

何も出ていないはずがないのに、リシャルドは舌で尖りを転がしながら言った。

「そ、そんなはずは……」

「ティアはもしかして、砂糖とか蜂蜜でできてるのかな」

「お、お戯れを……っ、んんっ」

かぶり、とクッキーにかぶりつくように、リシャルドは先端を甘く嘯む。

「ひ、ああっ……っ」

恋愛小説でも出てこないような甘い言葉が、いくつもリシャルドの口からこぼれてくる。

私からすれば、リシャルドの言葉も自分を可愛がる仕草も、何もかもが胸やけしそうなほどに甘くて、どうにかなってしまいたいそうさ。

結婚してからも、リシャルドは私を大切にしてくれているし、ベッドの上ではそれ以上ないほどに甘やかしてくれる。毎夜のごとく甘い言葉をかけられて、溶けてしまうのではないかと心配になるくらいだ。

甘い快樂で頭が蕩け始めたところで、彼は下腹部へと手を伸ばした。

「っ、んんっ……!!」

「は……こっちも、だいふ良さそうだね」

リシャルドがドロワーズの股下のスリットから手を滑り込ませると、愛液を滴らせた秘唇は、慣らしでもないのに彼の指をあっさり受け入れた。

「……っ、あ、ああっ」

「ん、あと二本、いけそうかな？」

「ひ、あ……っ、リシャルド様、あ」

「よしよし、いい子だね」

身体を振らせながら喘ぐ私の頭を、リシャルドは優しく撫でる。

彼の優しさに触れて、私は身体だけでなく心まで満たされていくのを感じた。どんな理由であっても、彼に褒められるのは嬉しい。

胎内を広げる指の動きは、やがて円を描くような動きへと変わっていく。その頃には、下腹部から水飴を掻き混ぜるような音が聞こえていた。

「っ、ああっ……!!」

やがて私は、リシャルドの指を締め付けて達した。

収縮するたびに、彼の指先や関節の膨らみの感触を身体の中で感じる。異物を入れられているというのに、恐怖心は湧かないのだから不思議なものだ。

リシャルドは、私の震える手に指を絡めて、頬に口付けてから口を開いた。

「ティア……準備は、いいかな？」

視線を下げると、リシャルドの男の部分が下穿きの中で存在を主張していた。それを下腹部に押し付けられて、断れるはずがない。

「……はっ」

いやらしい期待を悟られないように、私は小さく頷いた。

リシャルドはシャツを脱ぎ捨ててから、私のナイトドレスに手をかけた。

薄い布の下でソレはもう硬くなっているというのに、彼はまだ下穿きを脱いでいない。目の前にあるのは、ただの布の山。直接リシャルドの身体を見ている訳でもないのに、酷くいやらしく見える。

「ここがどうなってるか……気になる？」

ハッと我に返ると、リシャルドがからかうような笑みを浮かべて私を見つめていた。

そこでようやく、自分が衣服を脱がされている間、ずっと彼の下半身に目を向けていたことに気づく。

「……っ!!」

恥ずかしさのあまり、顔に血が上る。

赤らめた顔を隠すために、私はリシャルドから顔を背けた。

「っ、ち、違います……っ、その、これは……」

「すっごく物欲しそうな目になってたけど、違ったかな? ……じゃあ、いらないね」

「……っ、まって……っ!!」

反射的に私は、シャツを着直す素振りを見せたリシャルドの手を掴んでいた。

そんな私を見て、彼はにやりと笑う。

「ふふっ、そう来なくっちゃ」

つまりはこうなるのを見越して、リシャルドはわざと言ったのだ。

「っ、リシャルド様の、意地悪……!!」

「素直になつてくれたらもっとな可愛いんだけどな、ティア」

「も、もう知りません」

むくれる私のことなど気にすることなく、リシャルドは下穿きに手をかけた。

「……っ」

現れたのは、天を仰ぐように反り返った牡莖。

硬くなったそれは、彼の呼吸に合わせて僅かに震えていた。

リシャルドの牡莖は、くすみのない薄い肉色をしている。他の部位よりもやや赤みが強いだけで、まったく黒ずんでいない。

しかし、優しい色からは想像ができないほどに、とても熱くて硬いことは——彼に何度も愛されて、すでによく知っている。

竿に浮き出た血管を視線で辿つていくと、先端の丸い膨らみには透明な蜜が滲んでいた。

私の脚を左右に開き、リシャルドは自身を秘口に擦り付け始める。

「は……あ」

勃起した肉棒を片手で持ち、愛液を絡めるように動かすリシャルド。普段は透き通るほど白い彼の頬だけけれど、今は情事の熱で赤みがさしている。

リシャルドも少なからず、この行為に興奮している。そう実感して、私の女としての自己肯定感

がささやかに満たされた。

「……っ、ティア」

「っ、リシャルド様」

「どれくらい欲しかったか……身体で、教えて？」

そう言つてリシャルドは、私の中に熱い欲を突き入れた。

「……っ、あつ、ああつ!!」

「……っ、は、……ティア……っ」

初めは緩い抜き差しだったものの、それは次第に容赦ないものになつていく。

彼に腰を打ち付けられるたび、私はあられもない声を上げる他なかった。

「こら、逃げないで」

「ひ、あつ、ああああつ!？」

反射的に、挿入を浅くするため腰を引こうとしたものの、リシャルドの手によつて阻まれてしまう。彼は両手で私の腰を掴み、子宮の奥に先端を叩きつけるかのように腰を動かし始めた。

「……っ、は、ティア……っ、ティア」

「っ、あつ、ああつ」

銀髪が揺れ、乱れて朱色の頬に汗が伝うのも構わず、リシャルドは夢中で抜き差しを続ける。

しかし、どんなに乱れた姿であっても、彼が美しいことに変わりはない。快楽を感じながらも、私はそんな夫の色気たっぷりな姿に見蕩れていた。

「……っ!？」

不意に、蜜口とは異なる場所が刺激を受けたことに気づく。

見ると、リシャルドは秘芯を指の腹で押していた。

私と目が合うと、彼は挑発するように舌を出して、頬に流れた汗を舐め取った。

「ん、気づいた？」

「っ、あ、当たり前です……っ、んんっ」

これまであまり触れられたことのない場所を刺激され、鋭い快楽が与えられる。リシャルドの指が陰核を撫でるたびに、私の胎内は硬い彼自身を強く締め付けた。

「っ、ん、ティア……分かる？ ちょっと刺激しただけなのに……中、めちゃくちゃ締まってる……まるで、搾り取るみたいに……っ、そんなに、悦よかった？」

閨ぬいの授業で身体の構造については学んだものの、そこに触れたらどうなるかまでは知らなかった。未知の感覚に、私は少しだけ困惑していた。

「わ、分かりません……っ、ん、ああつ……!!」

「は……まだ分からないか……だったら、これから覚えていこうか……っ」

花芯から指を離し、リシャルドは抜き差しを再開した。

いつもの情事と同じ流れに戻り、安堵したのも束の間。限界はすぐそこにまで迫っていた。

「あつ、あああつ!!」

「は……ティア、ティア……!!」

最奥を穿たれて、私はどうとう絶頂を迎えた。
それと同時にリシャルドは、中で熱い白濁を溢れさせた。

「ぐ……っ」

歯を食いしばり身を硬くして、切なげな表情でリシャルドは射精の快感を堪能していた。
そんな彼の姿を見れるのはこの世の中で私だけなんて、いまだに信じられない。
ぼんやりとした頭で、私はそんなことを考えていた。

「……っ、は」

精を吐き出し終えてから、リシャルドはゆっくりと肉竿を引き抜いた。生暖かい精をこぼさないように、自然と蜜口に力が入る。

「……もうそろそろ、二、三おかわりが欲しいところかな」

「……え？」

「何でもないよ、おやすみ」

「……おやすみなさいませ」

ベッドに横たわり、リシャルドが瞼を閉じた後、私も眠りに誘われていった。

アイシングを入れた絞り袋の先を丸型のクッキーの上に近づけて、ゆっくりと円を描いていく。
いつもなら問題なく上手くいくはずなのに、途中で絞り袋を握る手が震えてしまい、アイシングがクッキーからはみ出てしまった。

「っ、また失敗だわ」

失敗作となったクッキーを皿に移して、私はため息を吐く。皿にはすでに、アイシングを失敗したクッキーの山ができあがっていた。

クララがリシャルドを褒賞として要求したことは、いつの間にか宮殿内でも周知の事実となっていた。

使用人たちが私に直接何かを言うてくることはないけれど、変に気を使われているのは嫌でも分かる。クララのことはなるべく考えないようにすると決めたものの、周囲にそんな態度をとられると、つい彼女が頭をよぎってしまう。

それに加えて、今日は休日で公務がない。仕事に没頭することができない代わりに、趣味のお菓子作りで気を紛らわそうと思っただけのもの、この有様だ。

「……もうそろそろお茶の時間だし、全部ひとりで食べちゃいましょう」

ため息を吐いて独り言を呟くと、厨房のドアから小さなノックが聞こえてきた。

その音だけで、誰が来たかすぐに分かった。

「ふふっ。イエジイ、いらっしやい」

扉を開けると、私の予想通りイエジイが立っていた。彼の顔には、「今日のお菓子はなあに？」と分かりやすく書かれている。

「今日はヒヨコちゃんと一緒なのね」

イエジイは宮殿内を散歩する時、決まって動物の形をしたポシェットを持ち歩いている。彼が

「連れ歩く」動物は日によりけりだが、今日は黄色のヒヨコだった。

「うん！ 見て、ヒヨコちゃんのお首にスタイを巻いてもらったんだ！ 後ろがちょうちよ結びになってるの！」

見ると、ヒヨコの首周りには、少し前に私が作ったチェック柄のスタイが巻かれていた。おそろく、メイドが気を利かせて巻いてくれたのだろう。

「あら、可愛いじゃない。とってもお似合いだわ」

「えへへ」

「こら、イエジイ。お義姉様の邪魔をしちゃダメでしょう？」

イエジイを追うようにやって来たのは、義母上だった。

「ユスティア、ごめんなさいね」

「いえ、ちよどお菓子作りも終わったところでしたから、お気になさらないでくださいな」

「あら、そうなの。だったら、良ければ一緒にお茶にしない？」

「おねえ様、今日のお菓子はなあに？ この匂い、もしかしてクッキー!？」

爛々とした目でイエジイに見つめられ、思わず苦笑する。失敗したものを食べさせる訳にはいかないで、私は仕方なく首を横に振った。

「ごめんね、イエジイ。クッキーを焼いたんだけど、全部失敗しちゃったの」

失敗したクッキーを山積みにした皿を見せながら、私は言った。

すると、義母上はとんでもない一言を口にした。

「あら、とつても美味しそうじゃない。ね、イエジイ?」

「うん！ 僕、おねえ様のクッキー食べたい!」

「お、お義母様……その、アイシングがはみ出てみつもないので、召し上がっていただく訳には……」

「このくらい、大丈夫よ。さ、食堂でお茶にしましょうか」

「わーい!」

こうして、失敗作のクッキーを三人で食べることになってしまったのである。

「どれもとっても美味しいわよ、ユスティア」

「あ、ありがとうございます」

アイシングを失敗したクッキーを、義母上もイエジイも次々と口に運んでいく。その様子を見て、私はようやくホッと息を吐いた。

(二人ともピンクのアイシングから食べたつてことは……機嫌は良いみたいね)

実は私には、お菓子作りとは別にもう一つ特技がある。

最初に食べるクッキーの色で、相手の気持ちを大まかに知ることができるのだ。これを私は、「クッキー占い」と密かに呼んでいる。

占い結果が良好なことに安心して、私もゆつくりとお茶を楽しむことにした。

「おねえ様。僕、おねえ様のことが大好きだよ」

「急にどうしたの？ イエジイ」

クッキーの欠片が付いた丸い頬つぺたを拭いてあげると、イエジイは私にそう言ってきた。驚いて聞き返したけれど、彼は照れ笑いを浮かべるだけで。

ちらりと義母上の方に視線を向けると、申し訳なさそうにされた。

「イエジイには今回のことを話してないんだけど……なんとなく感づいてるみたいで。ごめんないね」

まだ幼いものの、イエジイは賢い子だ。大人たちの態度を見て、彼なりに何かを悟ったらしい。

「おねえ様、これあげる。さっき作ったんだ」

イエジイがポシエットから取り出したのは、折り紙で作ったピンク色の花。

そのプレゼントは、私を元気づけるための気遣いに他ならなかった。

小さな紳士からのサプライズに、私はつい顔を綻ほころばせた。

「ありがとう、イエジイ。とつても嬉しいわ」

お礼を言ってイエジイの頭を撫でていると、様子を見ていた義母上が優しい口調で語りかけてきた。

「ユステシア。今回の件で貴女が心配することは何も無いわ。家族全員が貴女の味方だから、安心してちょうだい」

「つ、ありがとうございます」

「ウクラリーフ国王陛下を通じて、きちんとお断りしましょう。私と主人が矢面に立つから、大丈

夫よ」

そう言って、義母上は頼もしい笑みを浮かべた。その表情は、民から愛される王妃にふさわしいものであった。

義母上——セレスティーナ王妃は子爵家の出ということで、義父上との婚約が発表された当初は批判の声も多く上がったという。

しかし、彼女への批判は瞬間に収まった。思いやりのある性格と頭脳明晰な仕事ぶりがたちまち評判となったからだ。

ひとつ、王妃の人気を決定付けた大きな出来事がある。顔の痘痕できの治療だ。

カルナルタでは、数年前に痘痕の治療法が開発された。それは痘痕に限らず、傷痕や火傷痕などにも使える画期的な方法であった。

しかし、治療の際に皮膚を針で刺すため強い痛みを伴うこと、そして複数回の施術が必要ということもあり、なかなか普及しなかった。

そんな時に手を挙げたのが、義母上だった。

かつて義母上の顔には痘痕があった。化粧を施すことで痘痕があることを悟られないように長年努めていたが、新たな治療法を人々に知らしめるため、彼女はその傷をあえて大衆の前に晒さらした。

『過去の傷を隠して陰で生きているのではなく、新たな知恵を受け入れて日向で生きる選択肢を示す。それが、国の代表である王妃としての役目だと私は思うのです』

自らも傷を負う王妃の言葉は、多くの人々の心を打った。そして彼女は苦しい治療期間を経て、

痘痕がほとんど消えた肌を手に入れたのである。

義母上の勇氣ある行動は、病に苦しむ者はもとより、辛い過去を持つ人々に勇氣を与え、新たな技術を前向きに取り入れようとする民衆の氣風を育んだと言われている。

そんな彼女に心強い言葉をかけられると、自然と心が落ち着いてきた。

「ありがとうございます、お義母様」

「気にしないで。しばらくは好きなことをしてのんびり過ごさないな」

そこまで話していたところで、食堂に義父上がやって来た。

「貴方、お帰りなさい」

「ああ、ただいま」

とは言ったものの、義父上はかなり浮かない顔をしていた。

「あら、どうしたの？」

「それが……ウクラリーフの聖女殿の件、少し面倒なことになるかもしれないんだ」

せつかく温まった心が再び冷えていくのを感じたのは、言うまでもない。

「面倒なこと……と言いますと？」

ちようどりシャルドも公務から帰ってきたこともあり、彼と義父上を加えてお茶会は仕切り直しとなった。

失敗作のクッキーは完食していたので、テーブルの上にはシェフお手製のフィナンシェが並んで

いる。しかし、食堂には言い表せない緊張感が漂っており、お菓子に手を付ける者は誰もいない。

イエジイも話を聞きたそうにしていたが、ピアノのレッスンを口実に退席してもらった。

幼い息子を笑顔で送り出した後、義父上はため息交じりに本題を切り出した。

「今さっき、ウクラリーフの国王から手紙が届いたんだが……どうやら、聖女クララ殿は我が国への外遊をお望みらしい。しかもその間、うちの宮殿に滞在させてもらえないかと打診されてね」

「あらまあ」

「外遊を受け入れるにしても、聖女の訪問となると手配や調整が必要だから考える時間が欲しいと一旦返事を送ったが……彼女の執心ぶりは推して知るべしと言ったところか」

「……」

「すまない、ユスティア。君を不安からせたい訳ではないんだ」

「い、いえ……」

外遊というのは建前であり、彼女の真の目的はリシャルドに会うことなのは明白。

私はすっかり困惑していた。

もし、クララがカルナルタに来ることになったら……リシャルドに何をするか分からない。

(でも、外遊自体をお断りするのには、ウクラリーフとの関係悪化に繋がりがかねないし……どうしたら……)

各々が思い悩む中、最初に口を開いたのは義母上だった。

「外遊自体、断っちゃいましょうか」

「そうだな。理由付けはいくらでもできるはずだ」

義母上の提案に、義父上も頷いた。あまりの即断即決ぶりに、私は慌てて口を開く。

「そ、その……ウクラーフとの今後の関係を考えますと、お断りするのにはさすがに……」

「ティアの言う通り、先々のことも見据えて外遊自体は受け入れた方がいいと思います。あとは私が適当に聖女殿を躲して、数日だけ辛抱する……というのが現実的かと。滞在先についても本宮ではなく離宮にすれば遭遇する回数を減らせるので」

国益に関わることなので、リシャルドも慎重に考えているようだ。

(……正直、クラーラの姿を想像するだけで動悸がするわ)

あの夜、人目を憚ることなくリシャルドを褒賞として求めたクラーラの姿を思い出す。

誰よりも美しい夫と、華やかで愛らしい聖女。

言葉を交わす二人を見て、私がどんな思いだったか。二人が並んだ姿は、目眩がするほど絵になっただけだ。

並び立つリシャルドとクラーラを見て不釣り合いなどという者は、きつとどこにもいない。

もし何かの間違いで二人が意気投合すれば、凡庸な私に付け入る隙はない。

ゆえに本音を言えば、リシャルドとクラーラをなるべく会わせたくない。でも、国益が関わることに私的な感情を持ち出してはならない。王子の妻として私にはその分別がある。

ここは私が、耐えるべきだ。

自分の気持ちを整理していると、義母上は言った。

「私からするとね、これを足がかりに、結婚を認めてもらえるまでウクラーフには帰らない」と聖女殿に要求されるのが、一番怖いと思うのよ。そうなってしまうえば、ウクラーフとの関係は余計にこじれてしまう。そうでしょう？」

「ああ、違う。それに、関係が悪化したら困るのはウクラーフ側も同じだから、いくら聖女の望みとはいえ強硬な姿勢は取れないはずだよ。だから、安心しなさい」

「ですが、父上」

「リシャルド。今はユスティアを守ることだけ考えてあげて。国のことは心配しなくていいから、大丈夫よ」

そう言って、義母上は話を締めくくった。

義両親に説得され、私とリシャルドは悩みつつも頷くことにした。

「そうと決まれば。次は楽しい話題だ」

義父上はそう言って、テーブルの上に紙の資料を広げた。

「視察の件、無事にアルラニから許可を得られたぞ。アルラニ国王陛下も二人が来るのを楽しみにしているよと仰られていたし、良かったじゃないか」

「父上、本当ですか！」

義父上の言葉を聞いた途端、リシャルドは弾かれたように立ち上がり、嬉しそうに金色の目を輝かせた。

「せっかくの機会だ。夫婦二人で楽しんできなさい。アルラニは自然に囲まれた静かな国だから、

落ち着いて過ごせるはずだよ」

結婚した夫婦はその年のうちに友好国へ視察に行く、という伝統がカルナルタ王室にはある。要するに、視察という名のついた新婚旅行だ。

リシャルドと話し合い、私たちは前々から友好国アルラニへの訪問を希望していた。どうやらその希望が無事に通ったらしい。

「日程も君たちが希望していたあたりで調整できるそうだ」

「まあ……！ でも、クララ様の件が落ち着いてからの方がよろしいかと……」

「あら、こんな時だからこそ、行くべきなんじゃないかしら？」

紅茶を一口飲んでから、義母上は話を続けた。

「二人が夫婦であることを世間に改めてアピールする良い機会だわ。あ、視察に行く時も、結婚指輪と婚約指輪は忘れずにね」

「……お義母様」

クララが何をしたとしても、私とリシャルドが夫婦であることに変わりはない。義母上は暗にそう言ってくれているのだろう。

「視察で回りたい場所を、いくつか決めておくといい。資料にまとめてあるから、二人でよく話し合いなさい」

さらに義父上に笑顔で資料を指さされ、私とリシャルドは思わず顔を見合わせて笑ってしまった。こうして私たち夫婦は、視察という名の新婚旅行に向けた準備を始めたのである。

時が過ぎ、アルラニへの視察の用意が一段落した頃のことだった。

私の実の父——コルビネロ伯爵が宮殿を訪ねてきたのは。

「お父様、お久しぶりです」

「元氣そうだな、ユスティア。宮殿での生活にはもう慣れたかい？」

「ええ。皆様お優しいので、毎日楽しく過ごしておりますわ」

「そうか、それは良かった」

良かったと言いつつも、父上の表情には影があった。

単に近況報告に来てくれたものだとばかり思い、何の気なしに応接室に通したけれど、何か重要な話があるらしい。

そう察して、私は椅子に腰掛けたまま背筋を伸ばした。そして何も言わず、父上の言葉を待った。「ユスティア。ウクラリフの聖女殿の件について、私も話は聞いている。今日お前に会いに来たのは、他でもないその件についてだ」

ウクラリフの聖女と耳にした途端、心臓がバクバクとうるさく鳴り始めた。

「国王陛下がクララ殿のカルナルタ訪問をお断りされたようだが……どうやら、彼女はそれに納得していないようなんだ」

「……なるほど」

「それだけではない。噂に聞いたところ、どうやらウクラリフ国王はクララ殿の望みを叶える

ために動いているようなんだ」

それは、初耳だ。

あまりのことに驚きを隠せず、私は無意識のうちにテーブルに身を乗り出していった。

「っ、お父様！ それは一体、どういう意味ですの!? そんなお話、私は聞いておりませんわ」

「そうだろうな。私もターニャから聞いて驚いたんだ。だが、あの子が侯爵閣下から聞いたと言うのだから、間違いなく事実だろう」

私の姉のターニャは、ウクラリーフの侯爵家に嫁いだ。夫である侯爵がウクラリーフの宮殿を訪れた際、どうやら偶然その話を耳にしたらしい。

「現状、カルナルタでは側妃を持つことは認められていない。そのため、カルナルタではなくウクラリーフでリシャルド殿下と婚姻関係を結ぼうと聖女殿は狙っているようなんだ」

父上いわく、聖女はこう考えているらしい。

カルナルタの国内でリシャルドの妻となれるのはひとりであり、その座にはすでに私がついている。そして当然、私を退かせるのは厳しい。

ならば、リシャルドにウクラリーフの爵位と領地を与え、カルナルタの王子ではなく、ウクラリーフの貴族として結婚してもらえばいい、ということになったそうだ。

「噂によると……リシャルド王子殿下に公爵の位を授けることや、どこの領地を与えるかについても、大まかに決まり始めているようだ」

「そんな……本人の了承もなしに、あんまりですわ」

「そうだな。お前の気持ちは十分に分かる。だが……相手は聖女だ。しがたない地方貴族にすぎない我が家では、どうにもできないんだ」

「……っ」

そう。私の生家であるコルビネロ家は田舎の伯爵家で、大した家柄ではない。国へ多大な貢献をしている聖女と、ただの田舎貴族出身で大した功績もない私では、妻としての価値に雲泥の差がある。

「ユステシア。私も本当は娘にこんなことを言いたくはない。しかし、こればかりは致し方ないことだ」

「……」

「お前が王子殿下と仲睦まじく過ごしているという話はよく耳にするよ。でも……いつ起きるか分からない。もしものこと」は、どうか覚悟してほしい」

辛そうな声で、こうして現実を知らせてくれた父には感謝しかない。

リシャルドも義両親も「離婚は絶対にならない」といつも励ましてくれるけれど、相手が聖女である以上、何が起るかわからないのも事実。

事が起れば、私はしがたない貴族の娘らしくすべてを受け入れるしかないのだ。

「……はい。承知しました」

暖かい季節だというのに、胸の奥が凍えている。

見慣れた景色がくすんでいくかのような錯覚に襲われながらも、私は父上を見送ったのだった。